

「第七の習慣 刃を研ぐ」編の狙いと使い方

この「第七の習慣 刃を研ぐ」は、大きく6章に分かれています。最初に、「7つの習慣」について簡単に振り返ります。私たちが現在置かれている状態を改めて確認し、その上で、リフレッシュすることや刃を研ぐことの必要性について考えます。

「第七の習慣」は、第一から第六までの習慣とは少し異なり、これまで学んだ習慣（能力）を上向きの螺旋状に伸ばしていき、さらなる成長を促すための習慣です。本書では、「第七の習慣」が個々の習慣といかに結びつき、関連しているかについても、言及しています。

そして、人間が本来持っている「4つの能力」について紹介し、そうした能力をどのようにして伸ばしていくかを考えていきます。

本書は、「刃を研ぐ」ための考え方や概念をわかりやすく説明しながら、事例を豊富に取り入れ、皆さんの仕事やプライベートの内容を振り返っていただけるように編集してありますので、素直に感じたことや思ったことを自由に書き込んで、あなたが本来持つ力（能力）を発見してください。

自由に記入していただく箇所には、特に正解があるわけではありませので、リラックスして取り組み、ありのままの気持ちを表現してください。正しい答えを探究するというより、「なぜそのようなアプローチをとるのか」について深く考えていただくことをお勧めします。そうすることで、普段とは違う自分自身、思いがけない真の姿を発見することができるはずです。

本書には、映像作品が2タイトル収録されています。フランク・リン・コヴィーのセミナーではおなじみの作品ですが、今回はまとめとして最後の第6章に登場します。「DVDをご覧ください」

と表記してあるところでご視聴ください。

また、演習ページには余白スペースが多めにとってありますので、思いついたことや気がついたことはどんどん書き込みましょう。後で見返したときに、そのメモが思わぬ力を発揮します。

それではリラックスして取り組んでください。

DVD の紹介



トリムタブ



レガシー

演習欄や余白には、しっかりと書き込みましょう。



「7つの習慣」とは①

『「7つの習慣」セルフ・スタディ・ブック』シリーズでは、既刊の「基礎編」「第一の習慣」「第二の習慣」「第三の習慣」「第四の習慣」「第五の習慣」「第六の習慣」に、今回の「第七の習慣」を1つずつに分けて紹介しています。これらを着実に身につけることで、ビジネスの成果を得るだけでなく、有意義な人生を送ることを目的としています。

第一の習慣から第三の習慣は、あなたが自立するための習慣です。「自分の人生を自分でコントロールする」ために、「セルフ・リーダーシップ」について学びます。

自立は当然と考えているかもしれませんが、あなたは本当に自立しているのでしょうか？ ビジネスで成果が上がらなかったり、人間関係で悩んでいるとしたら、真の自立ができていないことに原因があるのかもしれません。

スキルやテクニックを覚えるより、真の自立とは何かを考えたほうが、きっと成果を得ることができるようになるはずです。自立するためには、次の3つの習慣を身につけなければなりません。

・第一の習慣 — 主体性を発揮する

自分に降りかかる周りの環境からの刺激に対する反応や行動は、すべて自分自身が選択することができること。そしてそれらについてあなたが責任を負わなくてはならないことを学びます。「問題が自分の外にあると考えるならば、その考えこそが問題である」とはコヴィー博士の言葉です。

・第二の習慣 — 目的を持って始める

あなたが何を大切にし、どういったことを達成したいのか。それを考え抜き、ハッキリさせてから行動するという習慣を身につけます。あなたのすべての行動にコミットメントと理由が付随するようになりますから、やる気に満ち溢れ、やりがいを感じる事ができるでしょう。

・第三の習慣 — 重要事項を優先する

会社から与えられた膨大なタスクに加え、父親や母親、恋人、テニススクールの一員など、さまざまな役割を担っているあなたは、仕事以外にもすべきことが多いはずです。そうした多くの役目をどうすればこなせるのでしょうか。やるべきことをきちんと実行するために、重要事項を優先することを学びます。

ポイント

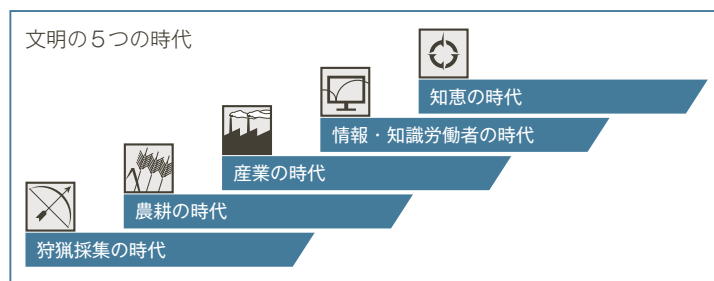
セルフ・リーダーシップとは、個人個人が自らの方向をしっかりと定め、自らの意志の下、その状況において正しい判断を行い、主体的に行動することです。そのためには、第一の習慣、第二の習慣、第三の習慣を身につけなければなりません。

習慣は初めは蜘蛛の糸のようにはかないものだが、やがて丈夫な糸になる。

— スペインのことわざ

時代の変化

マネジメントの第一人者である P・F・ドラッカーは、20 世紀において、最大の出来事は何であったかという問いに対して、「人口革命。(中略) 先進社会における労働力人口の中身の変化、肉体労働者から知識労働者への重心の移動」と述べています（『プロフェッショナルの条件』ダイヤモンド社、上田惇生訳より）。



この図はドラッカーの概念をベースにコヴィー博士が説いた、文明の流れを示したものです。

狩猟採集時代の人間は、毎日弓矢や石や棒切れを持って食料を探しに出かけていました。やがて農民が登場し、狩猟採集民の約 50 倍の収穫を得るようになります。やっとの思いで食いつないでいた狩猟採集時代とは違い、農民たちは計画して収穫を得るスキルを身につけ、子どもに教育を施す余裕すらありました。

何世代かを経てやってきた工業・産業の時代では、人間は工場を建て、業務の専門化や委任の方法など、極めて効率よく生産する方法も知りました。工業・産業の時代の工場は農民の約 50 倍の生産性を実現し、やがて農民の数は約 90% 減少しました。農民として生き残った人々も、効率良く大量の収穫を得る産業型の農場を生み出しました。

今日、アメリカにおいて農業を営む人は、国民のわずか 3% だ

そうです。その彼らが国内はおろか、世界の大半の食料を生産しているのです。

今、私たちが迎えている情報・知識労働者の時代は、工業・産業の時代の生産性を 50 倍も上回ることができるのでしょうか。コヴィー博士は現代においても、さらに大きな変化が起きているとし、次のように語ります。

情報時代は知識労働の時代へと急速に変わろうとしている。時代に遅れないようにするには自己の教育と訓練に投資し続けるしかない。多くの人は痛い目にあって初めてこの必要性に気づくだろう。

しかし、今何が起きているかを見抜き、自分を律することのできる人々は、自覚的に学習を続けるだろう。そして新しい考え方や新しいスキルを獲得し、新しい時代の現実を予測し、適応できるようにするまでやめないだろう。

質の高い知識労働の価値は計り知れません。人が本来持つ潜在的な可能性を解き放てば、組織は価値を生み出す途方もないチャンスを得られるようになるのです。

・ あなたの会社・組織の中で、時代の変化を感じるのは、どのような点ですか？

・ その変化に対し、どのような準備が必要ですか？

【記入例】
情報システムの進化について行けない。

【記入例】
スキルを磨く。若い人から柔軟に吸収する姿勢を持つ。

事実など存在しない。
ただ解釈があるのみ。

— フリードリッヒ・ニーチェ